

氏 名	岡本 幸江
学 位 の 種 類	博士(看護学)
報 告 番 号	甲第 57 号
学 位 記 番 号	看博第 16 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 27 年 9 月 18 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	生体肝移植を受けた子どもの家族のセルフケアに関する研究 Self-care for families of pediatric recipients of parental living donor liver transplants
論 文 審 査 委 員	主査 教授 中 野 綾 美(高知県立大学) 副査 教授 野嶋 佐由美(高知県立大学) 教授 長 戸 和 子(高知県立大学) 教授 池 添 志 乃(高知県立大学)

論文内容の要旨

本研究は、生体肝移植を受けた子どもとドナーを内包した家族が、生体移植前後にどのような家族のセルフケアを遂行しているのかを明らかにすることを目的とした、質的記述的研究である。この目的を達成するために、シンボリック相互作用論とセルフケア看護論を理論的基盤とした。高知県立大学研究倫理審査委員会の承認を得た後に、家族会 1 団体の承諾を得た。研究協力者は、両親のどちらかがドナーとなり、子どもが 15 歳未満で生体肝移植術を受け、移植後 1 年以上良好に経過した子どもの生活を維持した母親 11 名であった。データ収集期間は、2013 年 9 月～2014 年 1 月であった。データ収集方法は、半構成的面接法を用いて、研究協力者に 2 回のインタビューを行った。インタビュー内容は、研究協力者の同意を得て録音し、逐語録を作成しデータとし、Grounded Theory Approach を参考に継続比較分析を行った。倫理的配慮として、精神的に安定した状態で研究協力ができることが想定される、移植後 1 年以上良好に経過していることを選定基準とした。家族会内の連絡方法により、研究に関する説明会を案内し、関心のある人が自主的に参加できる状況を設定した。文書を用いて研究概要を説明し、研究への参加は自由意思であること、プライバシーや個人情報保護されること、研究への協力の可否により不利益はないこと、研究協力の後も同意を取り消すことができることを保障した。研究協力の意思のある人には、個別に説明を行い、同意書にサインを得た後に研究を開始した。

分析の結果、①親自身の命をかけて家族を守り子どもの命を救う、②瀕死の子どもの病状を注意深く捉える、③移植後の脆弱な子どもの変調に気を張って命を守る、④治療を組み込んだ生活を創る、⑤脆弱な子どもを育み家族の日常性を築く、⑥肝機能悪化を危惧しながら成長を促す、⑦移植後の子どもを持つ自分たち家族の生活を創る、⑧移植前後の重篤な子どもを抱えて家族が一体化する、⑨命に向き合い守る苦悩を家族で緩和する、⑩移植後療養生活で生じる家族員の不一致を緩和する、という、10 の家族のセルフケアの志向性と、39 の家族のセルフケア行動が抽出された。さらに、家族のセルフケアによる成果として、『移植を受けた子どものセルフケア能力の獲得を実感する』『家族のセルフケア行動の確立から家族としての成長を実感

する』『移植を通して家族になる』『家族そろったいつもの生活に意味を見いだす』『家族との生活の中で子どもの体は大丈夫という自信を掴む』『何があっても自分たち家族は大丈夫と確信する』が抽出された。生体肝移植を受けた子どもを持つ家族のセルフケアの志向性とセルフケア行動には、その特性から、[子どもの命や病状に注目するセルフケア][家族の成長と生活を維持するセルフケア][家族の困難に対処するセルフケア][家族が一体化するセルフケア]という4つのセルフケアがあると考えられる。

本研究結果から、生体肝移植を受けた子どもの家族のセルフケアとは、子どもの命や病状に注目するセルフケア、家族の成長と生活を維持するセルフケア、家族の困難に対処するセルフケア、家族が一体化するセルフケアから構成されており、これらを通して家族が成長するものであると定義づける。

以上より、生体肝移植を受けた子どもの家族が子どもとドナーとなった親を内包しながら、家族生活を営み成長することができるように、家族のセルフケアの志向性、セルフケア行動、セルフケアの特性を踏まえ、家族のセルフケアを支援する看護介入の必要性が示唆された。

審査結果の要旨

本研究は、健康問題を持つ子どものセルフケアの発達を支援する看護方法を探求してきた岡本氏の長年のテーマに根ざしたものであり、生体肝移植を受けた子どもの家族に注目し、子どものセルフケアに深く関わる家族のセルフケアの現象に焦点を当てた研究である。

両親のいずれかが、子どもの生体肝移植のドナーとなり、子どもの生活を主に維持した母親11名の研究協力者に、複数回のインタビューによりデータ収集を行い、**Grounded Theory Approach**を参考に継続的比較分析を行っている。

本研究の独創的な点は、ドナーとレシピエントの2人の家族員を内包し、健康状態に重大な影響を及ぼす家族のセルフケアに着眼した点である。生体肝移植の前後に生命に関わる重大な意思決定をしながら家族生活を維持し、様々な生活方法の変更や調整をしながら、新たな家族の生活に適応していくことは、容易なことではない。生体肝移植を受けた子どもが家族と共に生活を送り、家族の中でセルフケア能力を獲得していくには、協力して家族のセルフケアを遂行し、家族の健康を維持していくことが重要である。岡本氏は、家族のセルフケアの視点から、現象を浮き彫りにし、生体肝移植を受けた子どもの家族のセルフケアの10の志向性、39の家族のセルフケア行動を特定している。家族のセルフケアによる成果として、『移植を受けた子どものセルフケア能力の獲得を実感する』『家族のセルフケア行動の確立から家族としての成長を実感する』『移植を通して家族になる』『家族そろったいつもの生活に意味を見いだす』『家族との生活の中で子どもの身体は大丈夫という自信を掴む』『何があっても自分たち家族は大丈夫と確信する』を抽出している。

さらに、生体肝移植を受けた子どもの家族ならではの[子どもの命や病状に注目するセルフケア][家族の成長と生活を維持するセルフケア][家族の困難に対処するセルフケア][家族が一体化するセルフケア]という4つの特性について考察し、生体肝移植を受けた子どもの家族のセルフケアを「子どもの命や病状に注目するセルフケア、家族の成長と生活を維持するセルフケア、家族の困難に対処するセルフケア、家族が一体化するセルフケアから構成されており、これらを通して家族が成長するものである」と定義づけている。

これらの研究成果は、小児看護、家族看護の看護実践の場で、子どもと家族のセルフケア能力を高め、子どもの権利・家族の権利を擁護する看護実践に貢献するものである。看護教育においては、移植に関わる倫理的課題に取り組み、ケアの質の向上に貢献することができる教育プログラムの開発に活かすことができるものである。

本研究の成果は、岡本氏の、生体肝移植を受けた子どもの家族の体験を共感的に捉える力、研究に向かう真摯な態度、探求心、丁寧な分析によるものである。

以上のことから、本審査委員会は、本論文は、研究への着眼点、研究への着実な取り組み、研究成果の独創性、論理的な論証、研究成果の有用性と実践への適応可能性から、小児看護学全体の発展へ寄与する学術的価値があり、博士（看護学）の学位授与に値する研究成果であることを認めた。今後、岡本氏には、複数の家族員をデータソースとして家族を集団として捉え、生体肝移植のみならず移植を受けた子どもの家族のセルフケアの研究を積み重ね、生体肝移植を受けた子どもの家族のセルフケアを支援する看護介入プログラムへと発展させていくことを期待している。